



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレター 第499号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第499号. 京大東アジアセンターニューズレター 2013, 499

ISSUE DATE:

2013-12-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179782>

RIGHT:

## 目次

- 休刊のお知らせ
- 中国経済研究会のお知らせ
- 続・多国籍中小企業奮戦記 : ミャンマー編
- 上海街角インタビュー ⑪
- 【中国経済最新統計】

## 休刊のお知らせ

おかげさまでこの一年も「京大東アジアセンターニュースレター」を予定通り発行することができました。ここに深く御礼申し上げます。

また、大変勝手なことですが、年末年始につき、次週は当ニュースレターを休刊させていただきたく存じます。ご迷惑をお掛けしますが、ご理解のほどよろしくお願い致します。

編集者より

\*\*\*\*\*

## 「中国経済研究会」のお知らせ

2013年度第7回（通算第39回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりました。大勢の方のご参加をお待ちしております。

### 記

時 間 : 2014年1月28日(火) 16:30-18:00

場 所 : 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下一階みずほホール

報告者 : 張紅咏 (独立行政法人経済産業研究所 研究員)

テーマ : Does agglomeration promote the product innovation of Chinese firms?

注 : 本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2013年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期 : 4月23日(火)、5月21日(火)、~~6月18日(火)~~、7月23日(火)

後期 : 10月22日(火)、11月19日(火)、12月17(火)、1月28日(火)

(この件に関するお問い合わせは劉徳強(liu@econ.kyoto-u.ac.jp)までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。)

\*\*\*\*\*

## 続・多国籍中小企業奮戦記 : ミャンマー編

### なぜ今、ミャンマーに再挑戦するのか？

16. DEC. 13

中小企業家同友会アジア情報センター代表  
東アジアセンター外部研究員(協力会副会長)  
小島正憲

### 1. ミャンマー撤退

1997年、私は中国の香港返還時のリスク回避策として、ヤンゴンに縫製工場を立ち上げた。ビーフンの製造を行っていた汚い工場を借り受け、内装などを全面的にやりなおし、綺麗な縫製工場に仕立て上げた。また工場の脇にあった建物を改装して宿舍にし、私を始め日本人スタッフはそこに寝泊まりした。そして日夜、ミャンマー人幹部や労働者といっしょに生産に励み、1年後には600名の従業員を要す工場に育てた。当時はまだ、ミャンマーには日系の工場は全産業を通じて皆無であり、わが社が先駆的工場であった。しかしそのヤンゴン工場は、運悪く東南アジア通貨

---

危機などの逆風に曝され、3年経っても赤字体質から脱却できなかった。2000年、私は工場を香港華僑に売り渡し、きっぱりミャンマーから撤退し、中国へ戻ることにした。多くの中国ウォッチャーや識者の予想に反して、香港返還後も中国社会・経済は順調に伸びていたし、もちろんわが工場群も安泰だったからである。私はヤンゴン工場を去るとき、この地での3年間の苦闘を思い起こし、悔し涙を流し、唇を噛み、私を騙した悪漢の顔を思い浮かべ、「あいつの顔は2度と見たくない。ミャンマーなんかに、2度と来るもんか」と心の中で叫んだ。なお私は、その後、このミャンマーでの苦闘の経過をまとめ、「多国籍中小企業奮戦記」として刊行した。

## 2. 付いてきた通訳

工場の宿舎の食堂で、ミャンマー人幹部たちと、お別れパーティーを行っていたとき、通訳のSくんが私の耳元で、「私を中国の小島社長の工場に、連れて行ってください」とささやいた。私は即座に、「あなたは日本語とミャンマー語の通訳です。中国語がまったくわからないのに、連れて行っても使い道がありません。それは無理でしょう」と答えた。するとまだ20代前半だったSくんは、「私は中国語をすぐにマスターします。またどんな仕事でもやります。どうしても連れて行ってください」と真顔で頼み込んできた。私は、しばらく彼の顔を見ていたが、邪魔になるわけでもないからと思い、中国に連れて行くことにした。そのとき私は、ミャンマー人の彼に大きな期待をしていたわけではない。なにしろ、ミャンマーには2度と来たくないと思っていたからである。

その後、7年間、Sくんは中国工場でしっかり勉強し忍耐強く働いた。もちろん約束通り、1年後には中国語の通訳として活躍できるほどになった。もともと英語は上手で、IT関係にも強かったのも、彼はわが社のいろいろな部署で重宝がられるようになっていった。私はSくんの素晴らしい成長を目の当たりにして、彼に起業のチャンスを与えてやりたいと思うようになっていた。ちょうどそのころ、Sくんからミャンマーに帰って身を固め、ビジネスをやってみたいという申し出があった。私はそれを快諾し、「ミャンマーの地から新規ビジネスの提案をしなさい。それが面白そうならば投資してもよい」と答え、彼をミャンマーに帰した。その後、彼からはバス会社運営、中古車販売などの提案があったが、どれも投資額が多すぎて私の手には負えないと思ったので、その話しは断った。そのうち、彼から、「ミャンマーもネット環境が良くなってきたので、CADビジネスをやりたい」と言ってきた。私はそのアイディアにはすぐに乗り、ヤンゴンにCADセンターを開かせた。当時すでに、わが社は上海でCADセンターを運営しており、日本からのパターンメイキングやグレーディングの下請け作業を、ネットを利用して行っていた。Sくんもしばらくそこで働いたことがあったので、ヤンゴンでその“再下請け”を行うには好適であると考えたからである。上海では人件費も高くなり、せっかく教育した従業員もすぐに辞めてしまうので、困っていたからでもある。ほどなくして、SくんはヤンゴンCADセンターの経営を軌道に乗せた。

## 3. 中国の人手不足とミャンマーブーム到来

13億人を擁する人口大国中国にも、2003年を境にして、人手不足の傾向が現れてくるようになった。また2007年末の新労働契約法の施行は、労働者の権利意識を格段に高め、中国ではストライキの嵐が吹き荒れるようになった。また経済構造の改革を唱える政府によって、最低賃金の大幅アップが繰り返され、労働集約型産業は中国から逃げ出さざるを得ない状況になってしまった。かくして「中国は世界の工場」の座からすべり落ちた。中国から逃げ出した労働集約型企业は、いっせいに月給100ドル以下のミャンマー、カンボジア、バングラデシュなどを目指した。中でも、タイミングよく民主化を進めようとしていたミャンマーには、多くの企業が殺到し、数年前までは予想ができなかったようなミャンマーブームが到来した。

中国を本拠地としていたわが社も、低賃金国に工場移転をせざるを得なかった。2010年、私はミャンマーからバングラデシュに進出先を絞り込み、わが社の幹部と共に現地視察旅行に出かけた。Sくんの人脈をたどれば、ミャンマーで工場を稼働させることは、さほど困難なことではないことはわかっていたが、なにしろ私には強烈なミャンマーアレルギーが残っており、できることならミャンマーではやりたくなかった。

## 4. バングラデシュでの3年

ちょうどその視察旅行では、偶然にバングラデシュを先に訪ねることになっていたため、そこでバングラデシュの人口に圧倒された私たちは、ミャンマーに行く前に、ダッカに進出することを決めてしまった。もしこのとき逆にミャンマー進出を決めていたら、ミャンマーでの「後発の利」を得ることは難しかっただろう。今では、これもまた私の授かっている「強運」なのだろうと思っている。

私は5年前に会社経営の第一線から退いていたので、このダッカ工場の立ち上げにはまったく関与していなかった。それでもわが社の幹部とわが息子が、現地の多くの人びとに支えられながら、多くの困難を乗り越え、立派な工場を造り上げた。そして「石の上にも3年」の格言通り、3年後には1500名体制で黒字化という目標を達成した。さらに2013年11月には、バングラデシュの業界団体から、「外資系最優秀縫製工場」として表彰されるまでになった。

2012年10月、私はその工場現場に入り、日本人スタッフや現地人の工場幹部などの話を聞き、工場内を見て回った。そこで私は工場の現状から、私の工場作りの思想とは異質なものを感じ、わが息子の工場運営の手法に少し

疑問を抱いた。それでも私はわが息子がせつかくここまで作り上げた工場を、私の外的アドバイスで壊したくなかった。また反面、このままではこの工場がさらに飛躍することはできないだろうとも感じた。そこで私はわが息子に、遠慮しながら、「バングラデシュ人幹部のモチベーションを上げるには、彼らの向上心をもっと刺激するべきだ。その最高の方法は彼らに独立自営の機会を与え、それを実現させていくことだ。彼らの地元の田舎で下請けの小工場を作らせたらかどうか。ちょうど今、私の通訳をやっている男性の出身地がボリシャル県というところで、労働者もたくさんいて、賃金もダッカの半分ぐらいだと言っている。工場の幹部の中にもボリシャル県出身もいる。一度、この田舎を見に行ってみないか」と言ってみた。

1か月後、私とわが息子、わが社の幹部は、通訳の案内でボリシャル県を訪ねた(このときの詳細については、「ボリシャル管区視察記」として2013年3月に各位に送信済みである)。視察後、私は通訳に、「ボリシャル県から、優秀な人材を20名ほど選んで工場に連れて来てほしい。その中から独立自営できる人を育てたいので、その意志のある人を選んで来てほしい」と頼んでみると、通訳は、「承知しました。そのような人はたくさんいます。すでにダッカで数年働き、技術を持っている者や工場管理の経験のある者もいます。すぐに連れてきます」と答えた。

1週間後、通訳は約束通り、20名ほどの若者を工場に連れてきた。私とわが息子は彼らと面接し、彼らの出身や経歴についてしっかり聞いた上で、わが社の方針を説明した。しかし残念ながら、その20名の中には、私が思い描いていたような人材は全くなかった。全員がわが社の現在の給料に強い関心を示すのみで、数年後の独立自営の話などには全く耳を貸さなかった。私はがっかりした。数日後、わが息子が私に1枚の報告書を出してきた。そこには、「わが社幹部全員にアンケート調査を行った結果、独立自営希望者はわずか2%でした」と簡単に書いてあった。

そんなある日、ブイヤンさんが中年の女性を伴って、工場を見学しにきた。その女性はボランティアで「貧困女子扶助組織」の責任者をやっているという。見学後、会議室で私は彼女に、「あなたの組織の中に、縫製工場を自営してみたいと思うような、気概のある女性はいませんか」と尋ねてみた。すると彼女は、「とてもよい話です。私の組織の下には、虐げられ、収入のない貧しい女性がたくさんいます。そんな話を聞けば、彼女たちは大喜びで飛んできます」と答えてくれた。数日後、私とわが息子は、彼女が連れてきた若い女性2名と面接した。彼女たちの辛い身の上話をしっかり聞いた上で、私はわが社の方針をじっくり説明した。彼女たちは神妙な顔でそれを聞き、「できるだけ早く技術をマスターし、故郷で縫製工場を開きたい」と決意を語ってくれたので、私は翌日から、わが工場に働いてもらうことにした。同席していた人事部長は、彼女たちに「わが工場には、毎日、たくさんのワーカーの応募があり、試験にパスしても入社は順番待ちです。そんな中ですぐに入社できたあなたたちは幸せだと思ってください」と言ってくれた。

しかしながら、翌朝、彼女たちが配属された部署の班長が私に、「彼女たちが、与えられた持ち場が嫌だと言って、ごねて働かないので困っています」と文句を言ってきた。私はすぐに現場に飛んで行き、彼女たちの言い分を聞いてみた。すると彼女たちは、「こんな簡単な工程はやりたくない。もっと難しいことをやらせてほしい」と言う。私は彼女たちに、「黙って班長の指示通りの仕事をやってください。もしそれに従えないのなら、すぐに工場から出て行ってください」と厳しく言った。彼女たちは渋々、仕事についた。2か月後、彼女たちの中の一人は、自ら辞めていった。

私はこの2回の失敗経験で、バングラデシュ人気質を少し理解できたような気がした。またダッカの工場では、今までの私の縫製工場経験は、あまり役立たないのではないだろうかと思うようになった。そしてこの工場をここまで造り上げたわが息子の勝ちを素直に認めるべきだと思うようになり、もうここにはオヤジの出番はないのだと自覚した。

## 5. ハルタル

2013年になって、ハルタルと呼ばれるバングラデシュ特有のゼネストが頻発するようになった(ハルタルについては、4月に、「ハルタル速報」として、各位に報告済みである)。このハルタルの被害が、年初は、ダッカでもっとも多くの縫製工場が集中しているアシュリア工業ベルト地帯で多発していた。わが工場のあるガジプール地域では、ほとんど実害はなかったので、私は呑気に構えていた。ところが4月末、突如、NHKのニュース画面に、ハルタルの襲撃で数十枚のガラスを壊されたわが工場の映像が大きく映し出された。私はびっくりして、すぐにわが息子に電話をして状況を確認した。するとわが息子は落ち着いた声で、「工場のガラスが割られ、暴漢たちが工場へ入ってくるようだったので、ただちに工場の操業を止め、休日にしました。工場長とも相談し、後3日間を続けて休日とし、5月1・2日のメーデー休日を含めて6連休にします。連休中、私はここを離れて香港の事務所に行きます」と答えた。私はその答えを聞いて、安心すると同時に、わが息子の危機対応の態度に一抹の不安を感じた(詳細については、「バングラデシュ短信:2013-No.8」において報道済み)。

その後、ハルタルはひとまずおさまったが、ラマダン明けには再び活発化するだろうと予測されていた。私はラマダンが終わり、世情が落ち着いたところを見計らって、9月18日からダッカの工場に入った。しかし、はからずもハルタルに遭遇することになり、貴重な経験を積むことができた(詳細は、「2013年:2013-No.17」において、報告済み)。このとき私は現場で素早く状況把握に努め、その場でわが息子に危機対応の手法を伝授しようと考えた。そのときわが息子は、現場の騒然とした雰囲気の中でも冷静沈着であり、「うろたえた姿」をいっさい見せなかった。私はわが息子の頼もしい姿に、ますますオヤジの出番がなくなったことを感じた。しかしオヤジとしては、このようなときにこそ、わが息子に、現場から逃げないで、陣頭に立ち事態の解決に当たって欲しいと思い、荒れ狂う暴漢たちを前に、「危機に



おけるリーダーのあり方」を説教した。私がわが息子に、意見がましいことを言ったのは、これが最初であった。おそらく最後だろう。

ハルタルがわが工場に及ぼす実害は微々たるものだった。しかしその後、さらに大きな規模となり、バングラデシュ国家を揺るがすような事態になる可能性はゼロではなかった。私はビジネスの現場から引いた身ではあったが、ハルタル激化の結果、ダッカ工場が苦境に陥ることを傍観していることはできなかった。そしてその場合の最善のリスク回避策は、さらにもう1個所、他国に拠点工場を造ることだと考えた。またそこでならば、私がだれに気兼ねすることもなく、最初から自分の理想の工場造りができるのではないかと思った。

## 6. 二つの「感激の再会」

ミャンマーでは、世界中の労働集約型企業が一举に参集したため、ヤンゴン周辺ではすでに人手不足が発生し、しかも民主化の進展とともに、労働者の権利意識が高揚し、ストライキが頻発するようになっていた。また地価も驚くほど高くなり、労働集約型企業には地方にしか進出余地は残されていなかった。私はミャンマーにはSくんという絶対の切り札を持っていたので、ヤンゴン周辺には縫製など労働集約型企業が進出しても、肝心の労働者が不足しているという情報をしっかり把握していた。Sくんを通じて、進出適地を探していたところ、パティン市に巨大縫製工業団地ができるという情報が入ってきた。さっそく現地に飛んで見たところ、それは旧知のウー・アー・ウィン氏が開発しているものとわかり、私は彼と劇的な再会を果たした(詳細については、「ミャンマー情報検証 2013年2月」参照)。

私がヤンゴンでいろいろな情報を集めているとき、Sくんが、「明日の晩、オーナーの予定は空いていますか。以前の工場の幹部メンバーが一度、会いたいと言っていますので、食事会でもやろうと思っていますが、いかがですか」と聞いてきた。予定は空いていたし、13年ぶりに昔のメンバーに会ってみたかったので、「OK です」と返事した。翌日、レストランには、かつての仲間が集ってきた。私は2～3人だろうと思っていたが、最後には10人ほどになった。中には、どうしても思い出せない人もいた。工場で最後まで工場長を務めてくれた美人のMさんは、見違えるように太り、肝っ玉母さんみたいになっていた。集まってきたメンバーの間には、工場売却後も交流があったようで、食事の間、ずっと話が盛り上がっていた。宴もたけなわになってきたころ、Mさんが私に、しみりと、「私はあのとき小島社長に、もっと生産性を上げるように言われたが、どうしてもそれができなかった。あれから他の工場に移り、そこでも工場長をやって、いろいろな勉強をした。今なら、小島社長の期待に答えることができます」と話してくれた。それを皮切りに、たくさんの人が、その後の自分の状況などを私にどんどん報告してくれた。私は静かに話を聞いていた。中には、マレーシアに出稼ぎに行き、そこで工場管理者を数年務めたという人、中国系の工場で責任者を任されている人、検品会社を自営している人などがいて、それぞれに出世しているようだった。

そろそろお開きというころになって、またMさんが、「小島社長は、またミャンマーで縫製工場を始められるのですか。もし始められるのならば、私は一番で駆けつけます。今度は私が工場を成功させます」と大きな声で話してくれた。すると集まってくれた多くの人が、「私たちも行きます」と真顔で言ってくれた。私はそれを聞いて、もしこれがリップサービスであったとしても、私のかつてのミャンマーでの苦闘は、彼らのこの言葉だけで十分に報われたと感じた。そのとき、私の心の中は、感謝の涙で一杯になっていた。

## 7. 想定外の土地出現

私はヤンゴンから2～3時間離れた地点で、工場用地を探した。その場合のもっとも重要な条件は、「労働者が徒歩で無尽蔵に集まって来る場所」であった。しかしこれは実際に工場を建てて、募集をしてみないとわからないことであった。すでに多くの工場がある場所では、ワーカーが集まることはわかるが、やがてワーカーの取り合いになることは必定であるから、工場がほとんど建っていない場所がよい。「にわとりが先か卵が先か」のような話になるが、まず私は、「1㎡が5ドル以下の土地で、周辺に工場がまったくない場所、そこに電気が来ていればさらによい。最低2万㎡は必要」という条件をSくんに示し、条件に合う土地を探させた。

すぐにSくんから、「私の妻の実家は、ヤンゴンから車で5時間ほど北に走ったピー市というところにあります。そこに工業団地があって、だいたい条件に合致します。妻の父も、そこに縫製工場を造ることに大賛成で、彼の人脈も活用できるのでやりやすいと思います。土地は1㎡＝6ドルです」という連絡が入ってきた。私は良い条件だと思い、すぐにミャンマー入りし、現地に走った(詳細については、2013年8月に送信済みの「ピー市工業団地 調査報告」参照)。しかし、いざ私が土地購入の交渉に入ると、価格は1㎡＝12ドルにつり上がってしまった。さすがにこの価格では、初期投資額が大きすぎて縫製工場では回収することが無理だと思い、即座に購入決定はしなかった。その後、2週間、私は何度も収支計算をやり直し、ピー市の工業団地の土地を購入すべきかどうか、迷いに迷った。そのうちにSくんから、「土地のオーナーから、3日後までに契約しなければ、他者に売るという連絡が入っていますが、どうしましょうか」と言ってきた。それを聞いて私は、売り手の焦りを感じ、ひょっとするとぎりぎりまで待てば、少し価格が下がるのではないかと思ったので、あえてSくんへの即答は避けた。

約束の日になって、Sくんから私の元に驚くべきメールが入ってきた。「ピー市の土地ではなく、まったく新しく素晴らしい条件の土地の情報が入ってきました。私はすぐにそこに飛んで行きます。この土地を紹介してくれたのは、以前

の工場の裁断の班長で、先日の食事会にも来ていた SY くんです」。そしてその晩、S くんは新しい土地の詳しい情報を送ってくれた。それは私には想定外の朗報であった。私はその土地の購入を即断した。

以上

\*\*\*\*\*

## 上海街角インタビュー ⑪

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集团董事长（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

### 「中国におけるラジオの復権」

中国ではラジオの平均聴取時間が年々下がっており、2009 年は 10.6 分、2010 年は 10.4 分となっている。これは米国の 10 分の 1 という。2005 年には 49 分であったというから、2010 年は 80% 近く減少していることになる。私は上海の事務所で FM 放送の音楽番組を小さい音で BGM にしていたので、平均 4 ～ 5 時間は鳴らしていた（聴いていたとは言い難いが）。

中国人の友人によると、中国は米国化しており（すなわち車社会化）、ラジオが復権しているという。そこで、何人かの人にラジオをどこで聴いているか聞いてみた。質問は①家にラジオがあるか ②ラジオ放送はよく聴くか ③自分あるいは家族、友達は車を運転するときラジオをつけるか ④中国では老人や家で仕事をする人にラジオは人気があるか ⑤中国ではこれから車社会になり、ドライバー向けのラジオ放送が充実してくるか ⑥その他自由にコメント、のように尋ねた。

#### 1. 28 歳 女性

私の家にはラジオはありません。ただし、両親の家にはあります。スマホで FM も聴けるが、聴いたことはないです。音楽はダウンロードして聴いています。主人は車を運転するとき、いつもラジオをつけています。道路情報やニュース、音楽番組を聴いています。人気音楽 Top10 はラジオで知ります。今、ラジオをよく聴く人は寮に住む学生、老人、それにドライバーでしょう。私は、ラジオ番組はどんどん充実してきていると思います。日本はトンネルの中でラジオは聴けますか？ 上海ではトンネルの中では全然聴けません。

#### 2. 31 歳 女性

小さいラジオを持っています。上海へ出てきて寮に入ったとき買いました。でも、寮から出た後は聴いたことがありません。私はスマホを持っていますが、FM ラジオも音楽も殆ど聴きません。主人は車の運転中時々ラジオをつけて交通情報やニュースを聴いていますが、音楽は MP3 や CD の方が多いです。私の感じでは若い人は車に乗るとき以外はあまりラジオを聴かないと思います。上海ではバスとタクシーの運転手は一日中ラジオを聴いています。

#### 3. 43 歳 女性

家にラジオはありますが、殆ど聴きません。音楽はスマホで好きな曲をダウンロードして聴いています。主人は車の運転中いつもラジオをつけています。私の運転手も一日中ラジオをつけています。私の両親はラジオを聴いているのを見たことがありません。いつもテレビです。中国の老人もラジオ派よりテレビ派の方が圧倒的に多いのではないですか。今や上海の 80 後（1980 年以降の生まれ、30 歳代）の大半は自分の車を持つようになっています。これからのラジオ放送はドライバーを意識したものにならざるを得ないでしょう。

#### 4. 40 歳 男子

家にはラジオがあるけれど、誰も聞かないです。両親はテレビばかりです。ラジオは車を運転するときには聴きます。交通情報、ニュース、音楽。番組はラジオ局にお任せです。音楽を特によく聴くということはありません。ラジオは屋外で仕事をする人には必要でしょう。僕は出張中にニュースや台風情報を知りたいときスマホでラジオを聴きます。ラジオも重要です。新聞よりラジオの方が大事だと思う。最近、新聞は殆ど読んだことがないです。家ではインターネットが情報を得る主体です。

## 5. 20 歳 女子学生

家には立派なオーディオセットがあります。以前は父が音楽を聞いていたけれど、今は飾りです。音楽はスマホ、家ではテレビより iPad でドラマを見たりゲームをしている方が多いです。20 歳の誕生日に父に車をプレゼント（レクサスです）してもらったので、運転中はラジオをつけています。車ですか？ 私の友達は殆ど持っていますよ。

## 6. 20 歳代 男子学生

寮生活をしているので、ラジオは必需品。ロビーにテレビがあるけれど、部屋でインターネットを見ている方が多いです。車はまだまだ夢の世界。就職したらお金を貯めて買うよ。

## 7. 20 歳代 男子

ラジオもテレビも持っていない。パソコンもないよ。車？もちろん持ってない。スマホだけ、でもちっとも困らないよ。ニュースも音楽もスマホは万能だよ。

インタビューで端無くも中国の格差社会の一端に触れた気がした。また、中国はすでに車社会に突入していることを改めて感じた。

国家ラジオ映画テレビ総局の統計では、全国に 234 のラジオ局がある（米国：13938 局、タイ：2000 局以上）。中国ではラジオ局の設置は行政と同じ構造で、中央に一つ、各省に一つ、その下の各市レベルにそれぞれ一つある。チャンネルを増やすことが出来るが、局を増やすことは出来ないので無競争の状態。中央ラジオの一部チャンネルは政府の規定で全国中継。また、省の代表的なチャンネルは省内をカバーしているが、市民がよく聴くのは市レベルの現地チャンネルのようだ。

各省のラジオ局のチャンネル構成は似通っており、大体ニュース、経済、文芸、交通、音楽の各チャンネル。

AM 局は 531KHz～1602KHz の中、9KHz おきに全国あわせて 700 くらいのチャンネルがある。ただ、音質の関係で AM を聴く人は減っており、特に自動車でラジオを聴く人は殆ど FM を聴いている。

車の中でラジオ放送もよく聴く人は、近頃ドライバーを意識した番組構成になってきていると感じているようで、車社会に突入している中国ではドライバーを中心にラジオ聴取者が増えるのは確実なようだ。中国汽車工業協会がまとめた 10 月の新車販売台数は前年比で 20.3%増の 193 万 2600 台となった。1～10 月の累計は 1781 万 5800 台となり、このペースが続けば 2013 年通年では 2100 万台前後に達する。12 年の 1930 万台を上回り、過去最高を更新する。

以上

\*\*\*\*\*

## 【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2					1549	20.3	24.9				
10 月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11 月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12 月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012 年						2303	7.9	4.3				
1 月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2 月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3 月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5 月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6 月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0

7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年												
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。  
出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。